

過敏型自己愛青年のもつ心理的問題

——対人依存傾向と空虚感に着目して——

原 田 祐 奈

青年期には、多くの者が自分の役割、価値などに思い悩む。近年では、コミュニケーションツールの発展によって他者の顔色を窺い、わかりやすい承認を受けることで自己を安定化させるといったプロセスが増加した。こうした機会の増加は、対人葛藤を生む傍らで自分に対してなされる配慮への期待値を上げ、自己愛傾向にすることも考えられる。

日本で多いと言われる自己愛のタイプが“過敏型自己愛”と呼ばれるものである。過敏型自己愛者は、誇大な自己イメージを持ちながらも自己評価が低く、他者から肯定的に受け容れられることによって自己を安定的に保つ。そのため対人恐怖的な特徴をもち、他者の反応に非常に気を遣い、傷つきやすいことがこれまで指摘されている。しかし、他者に依って自己を安定させることは対人依存傾向を高める可能性がある。そして、本来的に尊大な自己を持っている過敏型自己愛者が他者に依存心を抱く両価的な状態となることで、空虚感を持つ可能性もあると考えられる。

そこで、本研究では第一に、過敏型自己愛傾向の青年が対人依存傾向を高めるかどうかを検討すること。第二に、過敏型自己愛傾向をもつ青年が、対人依存傾向にあることにより空虚感が高まるのではないかと検討することを目的とした。調査方法は質問紙を用い、分析対象は大学生・大学院生 527 名を対象とした。

統計的仮説検定を行ったところ、過敏型自己愛傾向の青年は対人依存傾向が高いことが明らかとなった。下位因子の関係から、他者がいなければ自身の価値を認識できず、自分を理解してほしい気持ちが強いほど、自分への肯定的な評価や、他者を強く必要とすることが理解された。また、過敏型自己愛傾向、対人依存傾向がそれぞれ高いものが空虚感も高いことが示された。因果関係の検討では、注目・配慮欲求は道具的依存を高め、自己不安定感を高めることが証明された。

得られた結果より、過敏型自己愛傾向にある青年にとって、他者は恐怖の対象でもあるが、肯定的に自己を受け容れてくれる存在でもあること。そしてそのような他者に対し、依存欲求を抱いていることが明らかにされた。不安定な自己を他者に依存することで安定化させようとしていることが考えられ、過敏型自己愛者にとっての依存が不適応的ではない可能性が示された。しかし自己の誇大性を無条件に認めてほしいと願う一方で、他者に助けを求める自己の存在を認知したとき、自己が不安定となることも示された。

本研究を通し、過敏型自己愛傾向にある青年が対人依存傾向にあり、空虚感を抱いていることが明らかにされた。過敏型自己愛性の特徴が互いに影響しあうことで対人依存や空虚感に影響をしているのではなく、下位因子間での因果関係があると示されたことは過敏型自己愛者の抱える問題を理解する上で重要な知見が得られたものと考えられる。